＊＊＊＊＊＊あなたの町の情報誌＊＊＊＊＊＊

住まいル新聞

日本ステンレス工業株式会社
発行/日本ステンレス工業株式会社
〒409-0617 山梨県大月市猿橋町殿上630-1
電話=0554-22-2500
FAX=0554-22-5234
Vol.191 2015 8月号

消えて行く 学校　井上　豊

【第三部　試験対照綴】

第三回　一年級　小試対照

修身科
読方科
作文科
しぶがき　やうじ　ハ
クボク　カウモリ　ふ
ゆはさむし　フユハサ
ムシ
習字科
算術科　五人の手足は
幾本なりや
○○○
○○○
○○○
○

上の数を三ケずつ分けたれば幾何。三十五と算用数字にて記せよ。

```
  2
 12
+35
```

幾何なりや。285と日本数字にて記せよ。

第三回　第二年級小試験対照

修身科
ナンジラ途中にて如何なる人に会いたるとき礼をなすや。小児の時は如何すれば人に愛せらるるや。
読方科
自由に水中を泳ぎ魚を捕らえて食物と為す。
作文科
鉄瓶の記
習字科
算術科
（一）生徒一人に付き柿三個ずつ八人に与うるときは幾何個を要するや。
（二）生徒一五人、内七人女なれば男幾人なりや。
（三）六五＋四五＋一三五＋一〇二五＝
（四）在校生と二五人、内病気五人、休校生二八人、出席生徒幾人なりや
珠（五）一五円と一三円三八銭、二二円三四銭の金高幾何なりや。

第三回　第三年級　小試験対照

修身科
ナンジラ人に論を求める時は如何するや。イトメは名高き孝女なり。その行を挙げよ。鳥獣中よく人のまねするものは如何。
読方科　ナンジラノ知る外国語を二、三個以上記せよ。渡船場とは如何なる所なるや。
作文科
買い物を頼む文　虎の記　公用　出産届
習字科
算術科
（一）白柿一個八厘五毛、五〇個を一折となし一折代八銭五厘なり。一折の代如何。
（二）　或人貧人一四五人へ一人につき三五銭ずつ施し、五円六五銭残れり。この人初めに何程の金を持ちしや。
珠（三）　諸君一年生より二年生の卒業まで、毎月一二銭ずつ月謝を納めたりとせば、その金高幾何。
（四）唐機のあわせを制する表もの円二〇銭、裏物五八銭、そで口八銭五厘、仕立て代一四銭費やし、四年間着用したり。一年いかほどなりや。

第四年級　小試験対照

修身科
（一）世間に如何なる者が福を受け、また如何なる者が福を受けざるや。
（二）小早川隆景の取扱いにより毛利家は終始事なかりしと云う。
取扱を問う。
読方科
門答　五港中もっとも盛んなる港の名を問う。降雨の多きは年中何月頃にして、何雨と云うや。
北条高時を亡せし人々の名を挙げよ。賑岡の人東京へ行くに二ケ所の鉄道ありと云う。諸君は何れの鉄道に乗るや。
記事　運動
作文科
算術科
（一）或人月給七五円にて一二月の費用金は五七六円なるときは、毎月余り金幾何なりや。
（二）　兄弟甲乙丙三人の年を合わすれば三〇歳なりと、甲は乙より五歳多く、また乙は丙より五歳多しと云う。丙の年齢何歳なりや。
珠（三）　養蚕家あり。一把二五銭、八五把の桑代は八円四〇銭の手間代を出し、繭二〇枚を得たり。今一五円の利金を得、売らば、一枚何円に売るべきや。
（四）一二〇坪の地面へ間口八間の家を建てんとす。奥行何間なりや。
（五）一円に付き八斗の米は一升の代幾何なりや。

第四回　一年級　小試験対照

修身科
目上は如何なる人たちなるや間じきりの開け閉めに如何なる作法あるや。
読方科
作文科
（一）サクラ
（二）サウシ
（三）きせる
（四）ウメノハナ
うめのはな
（五）ビヤウブ
習字科
算術科
（一）日本数　百三十五
（二）算用数　八十六
（三）

```
  12
+  4
```

（四）一二ケの丸を一人につき二ケずつ分けたい。一人につき如何。
（五）二人の目と鼻は幾つなるや。

第四回　第二年級　小試験対照

修身科
友人の内にて石筆及び紙などに差し支えたるときは如何すべきや。
孝行とは如何。
読方科　凧が青空にあり。
時計は一〇時です。
作文科　牛の文
習字科　九字
算術科
（一）試験の賞として一五三枚の白紙をもらいました。今その紙四二枚を使用せり。残り幾枚なりや。
（二）一年生二二人、二年級三五人、内女性徒五人なり。男子生徒何人なりや。
（三）四五六－三四＝
（四）　ここに六人の人あり。耳は幾何なりや。
（五）犬三匹の足の数如何。

残暑お見舞い申し上げます　日本ステンレス工業　代表取締役会長　石岡　博実

平成十二年（一九九〇年）、大月のタウン情報誌「住まいル新聞」を発刊してから十六年の歳月が過ぎようとしております。また、その編集された貴重な文面を、冊子にしてみようと試みてより、現在まで六巻を発刊することが出来ました。

これも偏に、各先生方始め、インタビューや文献整理に際しての関係各位、そして市民の皆様のご協力によるものと心より感謝申し上げる次第です。

しかし、此処まで来るには決して順風満帆では御座いませんでした。時には編集のチェックの甘さから、誤字脱字や参考文献の記載ミスなど数多くの失敗もありました。

今後は、更にチェックを重ね、皆様方の忌憚のないご意見、ご指導を賜りながら、発行二十周年へ向け倍する努力を重ねて参る所存です。引き続き、ご愛読のほど宜しくお願い申し上げます。

9月号へ続く・・・